

7. 骨格形成と土地利用の方針

7.1 土地利用の条件

(1) アプローチ・ルートとゲート

市街地から新キャンパスへのアプローチ・ルートとして、伊都土地区画整理地区及びJR筑肥線新駅方面から、波多江駅方面から、志摩町初方面からの3つのルートを想定している。

これらのルート設定に基づき、学園通線からキャンパスの東側と西側へとそれぞれ進入する2つのゲートをメイン・ゲートとし、市道桑原3515号線経由からのアプローチのゲート、波多江方面からのアプローチのゲート、初方面からのアプローチのゲートの5箇所のゲートを設定している。

特に、メイン・ゲートはキャンパス内における地域開放型の土地利用や施設設地と一体となった開放的で象徴的なゲートを計画する。

(2) 湧水源「幸の神」への配慮

周辺地域の貴重な水源の一つである「幸の神」の湧水量に極力影響を及ぼさないよう、西側の沢地やその周辺緑地の保全に配慮する。

(3) 緑地の保全

新キャンパス周辺は、田園や山林等が残る自然に恵まれた地域である。新キャンパス内に建設する施設群と周辺地域の緩衝帯として、キャンパス周辺の緑地を保全し、周辺自然環境や集落環境との調和を図る。これらの緑地の保全・活用を図ることに加え、開発によって失われる緑地の回復に努める。また、用地内で確認されている老齢の常緑広葉樹二次林、ヒノキ人工林等の注目すべき植物群落を保全するとともに、湧水源西側の沢地を「生物多様性保全ゾーン」として保全し、多様な生物種の保全と生態系の連続に配慮する。生物多様性保全ゾーンでは、シャジクモ、ナンゴクデンジソウ、カスミサンショウウオ、ホツケミズムシ、ゲンジボタル等の貴重種をはじめとする野生動植物の保全を図る。

(4) 治水・利水と地下水の涵養

各河川の流域面積を変えないこととともに、治水・利水対策としてキャンパス外縁部に農場や調整池を配置する。土地造成による地下水の極端な低下を招かないよう、雨水の地下への浸透と涵養等に配慮する。

(5) 歴史環境の保存

キャンパス用地内には、前方後円墳、円墳等の埋蔵文化財の存在が確認されている。九州大学では、学内外の研究者及び関係機関から慎重な意見聴取を進め、「九州大学新キャンパス基本構想における埋蔵文化財の取扱い方針」を決定しており(平成9年7月 将来計画小委員会) その方針を遵守するとともに、埋蔵文化財調査による新しい情報を柔軟に採り入れながら、歴史環境資源との共生をできるだけ図っていく。

埋蔵文化財の第20次調査地区については、最終報告書の結果を待って土地利用計画を立案する。

(6) 有効敷地の特性

隣接する集落との緩衝帯として保全される緑地の分布や点在する歴史環境としての埋蔵文化財の保存を考慮して、T字型の東西に長いキャンパスの中央部が、大学の研究・教育施設用地として利用可能となる。キャンパス用地は、一体的な利用が図れる中央部分の比較的平坦な敷地と、境界部分の傾斜地あるいは周辺と同レベルの敷地とに分かれる。こうした特性を活かして、土地利用を図る。



図7-1-1 土地利用上配慮する条件

7.2 ゾーニング

(1) ゾーニングの全体方針

全学的な見地から、形態的側面(東西に長い敷地形状等)、組織的側面(部局間の連携等)、機能的側面(キャンパスの一体感等)等の観点から、マスタープラン策定に先立つ土地利用方針として、新キャンパス全体のゾーニングを設定している(平成11年7月 将来計画小委員会)。但し、キャンパス用地は国民の財産であり、いかなるゾーニングも部局間の境界として設定するものではない。

全体方針としては、新キャンパス縁辺部の緑地を保全しながら、キャンパスのほぼ中央部に東西に長いアカデミック・ゾーンを設けることとしている。また、アカデミック・ゾーンの東側と西側には、それぞれ運動施設の立地する運動施設ゾーンを確保し、敷地南西部、中央部北側、東部に附属農場の立地する農場ゾーンを確保する。

(2) アカデミック・ゾーン

アカデミック・ゾーンは、主として研究・教育施設、共通利用施設等が立地するゾーンとして、新キャンパスのほぼ中央を占める。敷地形状から東西に長い形態とならざるを得ないが、アカデミック・ゾーンをさらにセンター・ゾーン、イースト・ゾーン、ウエスト・ゾーンに分節して計画する。

センター・ゾーンは、主として大学の共通利用施設(総合研究博物館、大学講堂、全学教育施設、本部事務局等)が立地するゾーンである。

イースト・ゾーンは、主として人文科学、比較社会文化、人間環境学、法学、経済学、言語文化の各部局の研究・教育施設が立地するゾーンである。

ウエスト・ゾーンは、主として理学、数理学、工学、システム情報科学、農学の各部局の研究・教育施設が立地するゾーンであり、当該部局に関連の深い共同利用・大型実験施設等を含む。

(3) 農場ゾーン

農場ゾーンには研究・教育施設、実験圃場及び関連施設を配置する。アカデミック・ゾーンとの機能的つながり、地形特性や従前の土地利用等を配慮して、農場ゾーン・東地区、農場ゾーン・北地区、農場ゾーン・南地区の3ヶ所に分散配置する。

(4) 運動施設ゾーン

運動施設ゾーンの配置について以下の点に留意した。

- ・平坦で広大なまとまりのある土地を集約して確保できること。
- ・将来的な拡張に対応ができること。
- ・周辺地域からの利用がしやすい場所であること。
- ・研究・教育施設への音等の影響に配慮すること。
- ・大規模駐車場に近接した利便性の高い場所であること。

これらの点を満たす区域として、運動施設ゾーン・東地区および運動施設ゾーン・西地区を設定する。

(5) 保全緑地

新キャンパス縁辺の斜面緑地と沢地を保全緑地として位置づけ、区域内の多様な生物種や自然環境の保全を図る。区域内には、現状保存する古墳等の埋蔵文化財包蔵地も含まれる。それら文化財の保存・活用を図るとともに、文化財と眺望のきく視点場等を巡る散策ルートを設けるなどして区域内を積極的に開放し、キャンパスに憩いと潤いを与える場となることを目指す。また、理学系野外生物実験地を、アカデミック・ゾーン理学系施設との連携に配慮した位置に設ける。

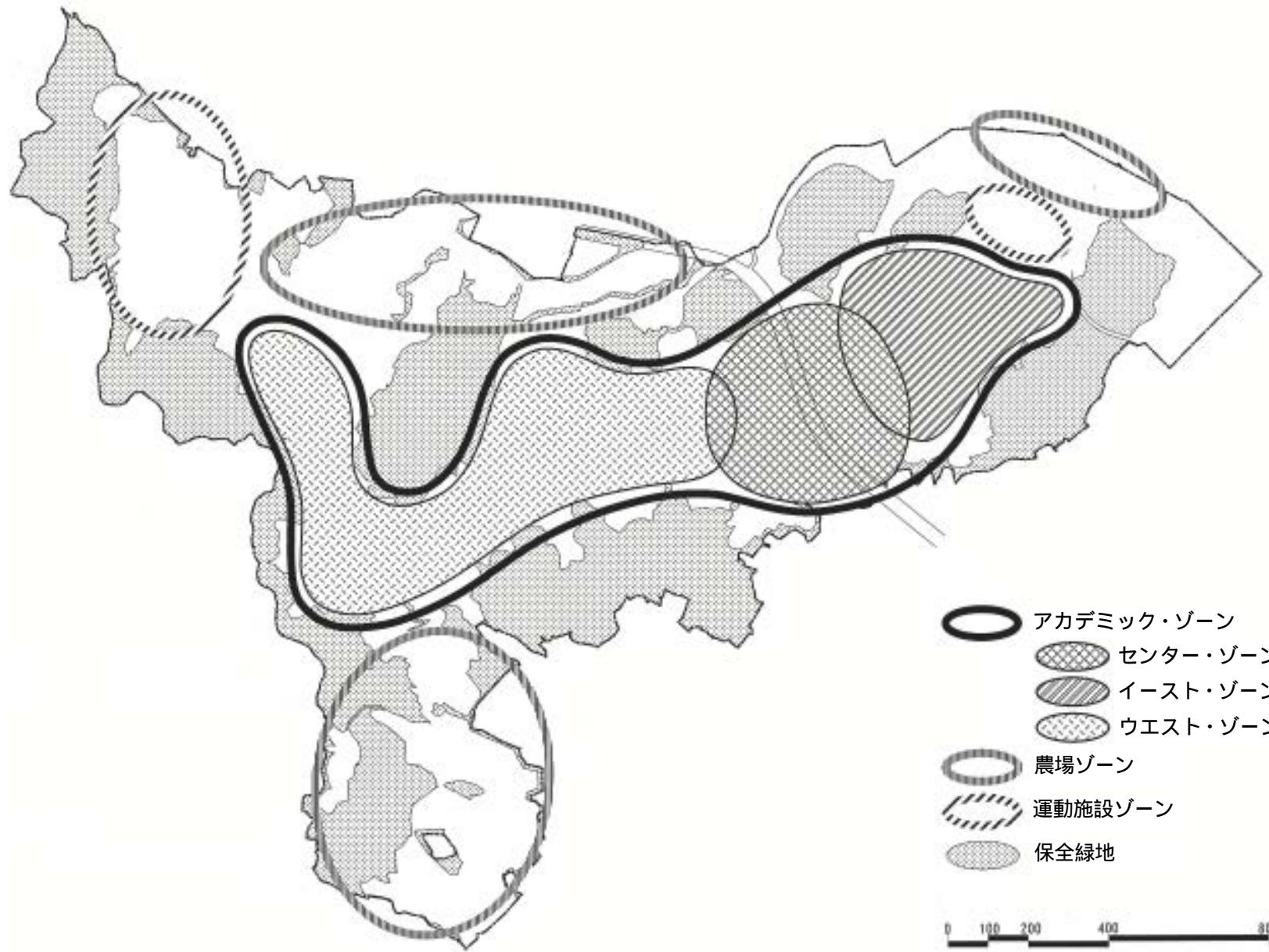


図7-2-1 ゾーニング図

7.3 眺望と景観

(1) 新キャンパスからの眺望

新キャンパスから眺望可能な特徴的遠景要素として、博多湾、福岡市街地、背振山系と田園、地域のランドマークである可也山などがある。これらの遠景要素への眺望を積極的に活かし、キャンパスの魅力向上を図る。特に、緑地の保全に配慮しつつ南側への眺望を活かした開放的なキャンパスを創り出すことを目指す。

(2) ランドマークとしての水崎城址の山

新キャンパス内に立地する山や丘陵地のうち、最も特徴的な景観要素として、キャンパス内の東部に位置する水崎城址の山が挙げられる。この山を、キャンパス内外のランドマークとして位置づけ、配置計画の手がかりとする。

(3) 周辺地域から見たキャンパス景観

周辺地域から見たキャンパス景観に十分配慮する。特にキャンパス内の施設群が創り出す景観と周囲の山並み、斜面緑地、集落等の景観との調和に配慮する。

(4) キャンパス景観の秩序と調和

キャンパス内の施設群の配置、形態、色彩等のデザイン全般の秩序と調和に配慮する。

(5) 新キャンパスから周辺地域へ連続する田園風景

新キャンパス周辺には豊かな田園地帯が広がっており、周辺と緩やかに連続した新キャンパス景観を作り出す重要な景観要素としてキャンパス内の農場を位置づける。

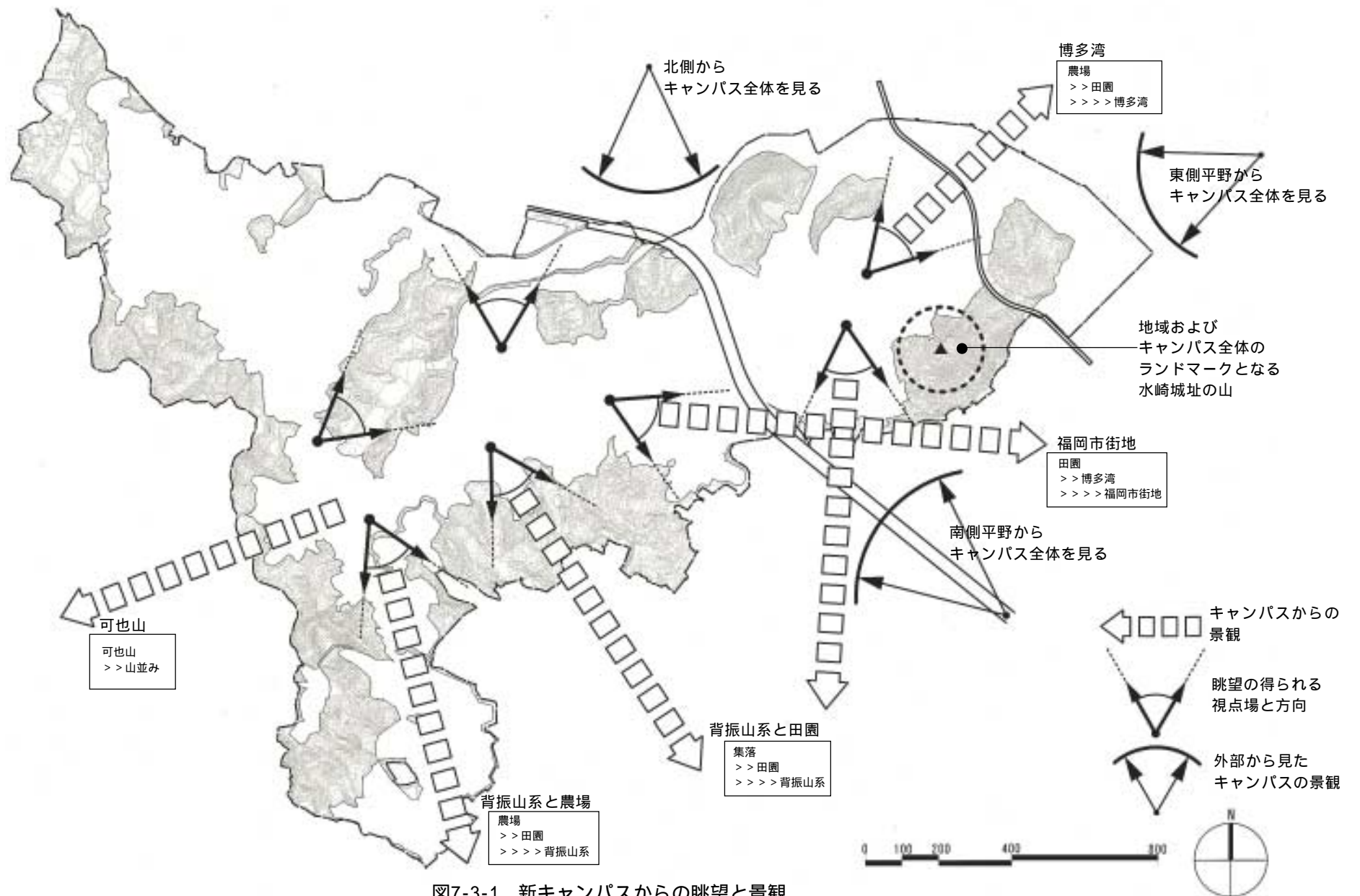


図7-3-1 新キャンパスからの眺望と景観

(6) 施設の平面配置の基準と地形との調和

東西に長いアカデミック・ゾーンに統合的に施設群を配置するための基準として、まず可也山と毘沙門山を結び、アカデミック・ゾーン中央を貫く、東西軸を設定する。

この東西軸を基準として、施設間のつながりや連続性に配慮しつつ、キャンパス内の各「場」における地理的条件に調和させることにより、周辺地形になじむ自然な施設配置形態を形成する。

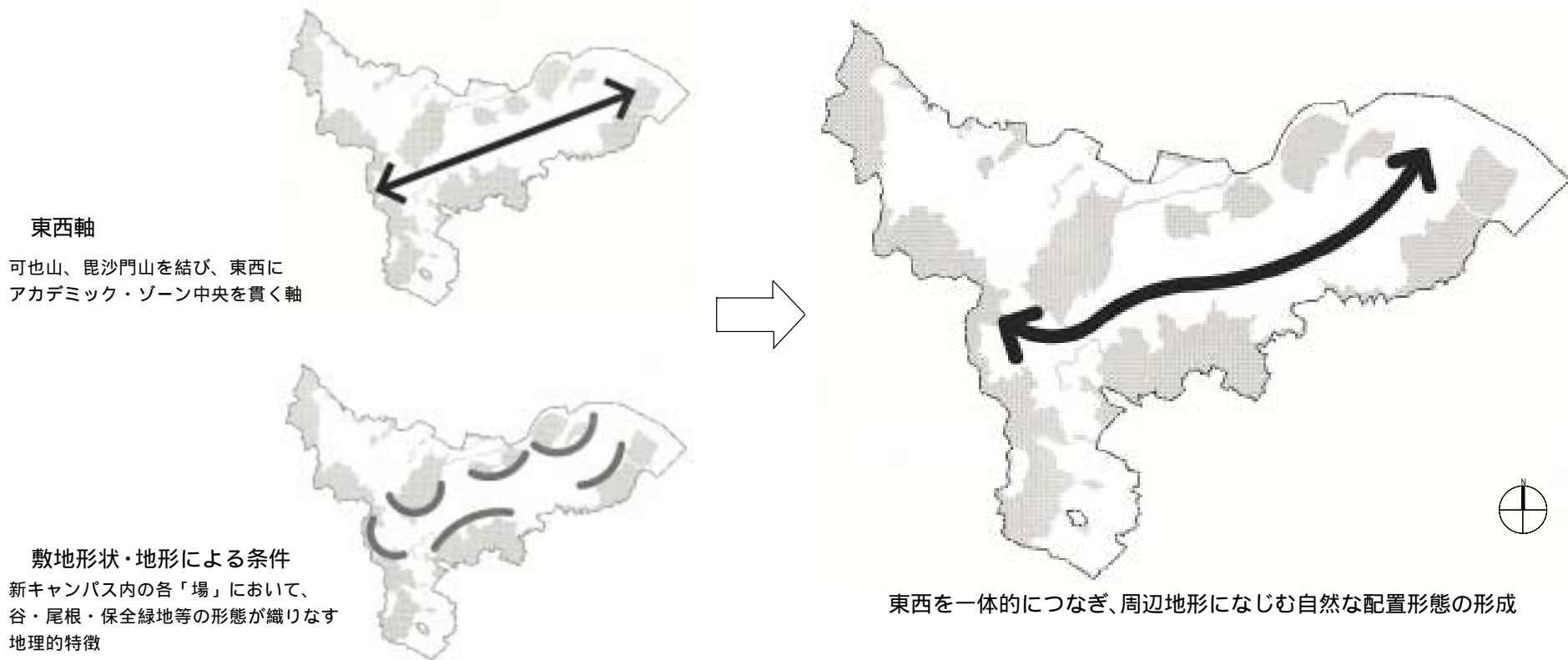


図7-3-2 施設群の平面配置の基準の考え方

(7) スカイラインの基準

遠景および周辺の山並みに配慮した建築形態とする。敷地内最高となる西側の山(121m)と、造成後ランドマークとして意識される水崎城址の山(95m)のそれぞれの頂部を結ぶ線をキャンパス全体のスカイラインの基準(目安)とする。

造成前の尾根線を意識し、周辺の山並みとの調和に配慮しながら、単調で画一的でない変化のあるスカイラインを形成する。

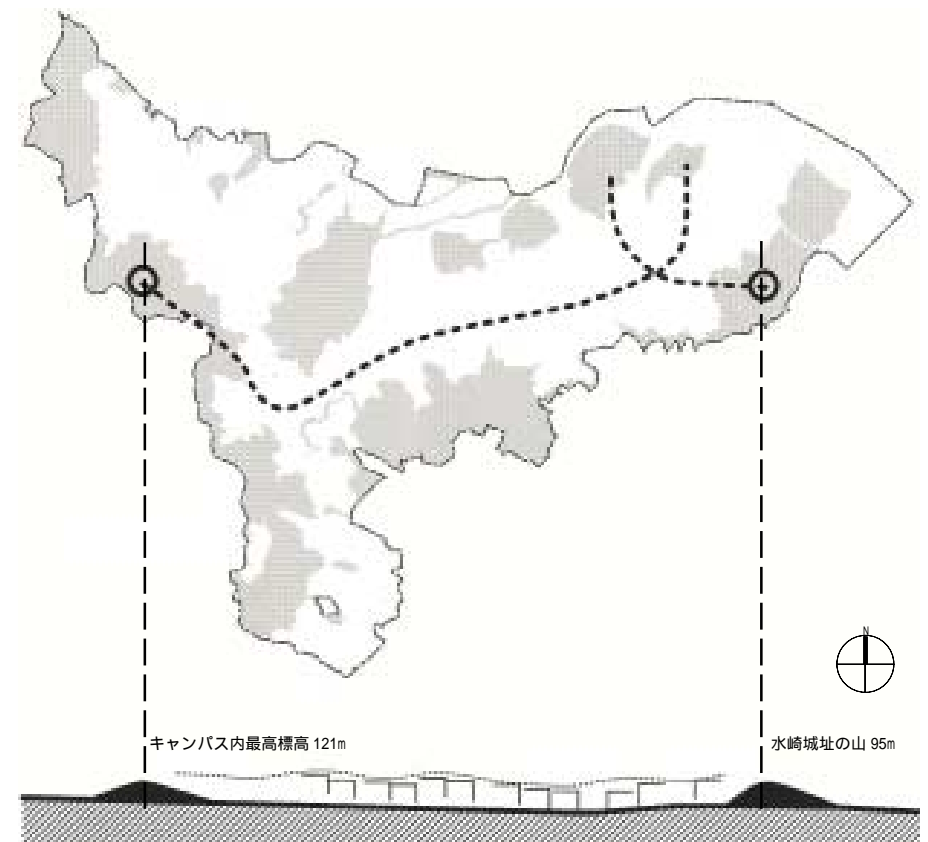


図7-3-3 山の標高とスカイライン形成の基準(目安)

7.4 骨格の形成

(1) 全体骨格形成の方針

新キャンパス全体に設定された各ゾーンを機能的に結ぶことにより、全体を貫く大きな骨格を形成する。新キャンパス全体は、主にアカデミック・ゾーンを中心とした東西に伸びる骨格と、農場ゾーン南地区から運動施設ゾーン西地区につながる南北の骨格により構成される全体骨格を形成する。

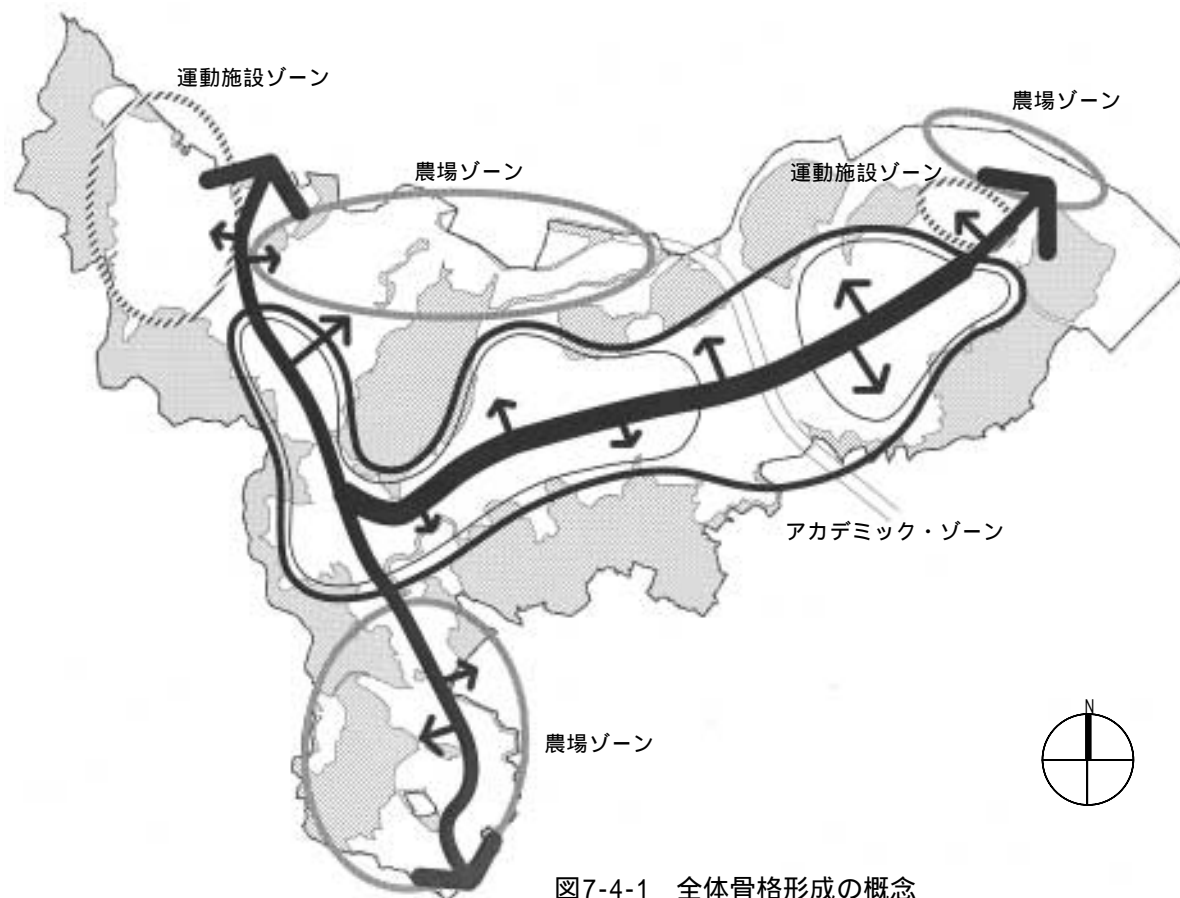


図7-4-1 全体骨格形成の概念

(2) 学際的な研究・教育活動をつなぐ連続的な空間「キャンパス・モール」

東西の全長約 2 kmにおよぶ長いキャンパスにおける一体的な土地利用、研究・教育活動の活性化、円滑な移動を図るために、敷地中央を東西方向に貫通するキャンパスの中心軸「キャンパス・モール」を位置づける。

キャンパス・モール沿いには、主として学部教育が実施される教育施設群を配置し、学際的教育を促進する軸として機能することを目指すと同時に、自動車やバイクを排除し、モール内の詳細な環境と沿道の施設を綿密に計画的に設計することによって人間主体の快適で賑わいのある空間形成を目指す。

学府・研究院および学部の各研究・教育施設は、基本的にキャンパス・モールに沿って一体的につながれる。

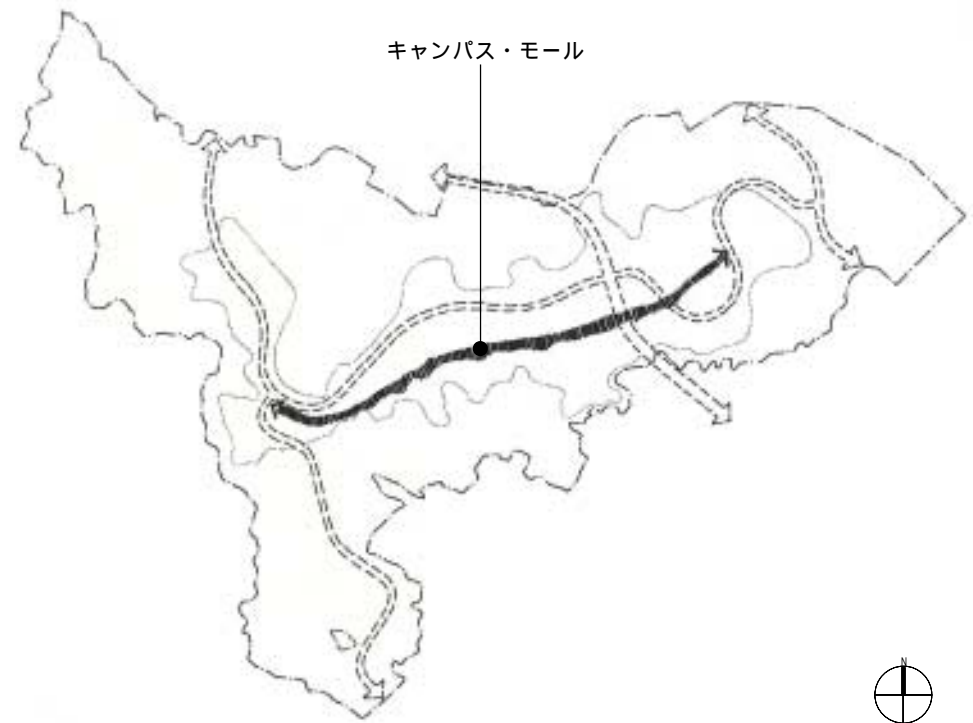


図7-4-2 キャンパス・モール

(3) 未来を拓く空間軸「未来のポテンシャル軸」

大学をとりまく社会状況がめまぐるしく変わろうとしている21世紀初頭の今、予測し得る範囲に限界がある。

本マスタープランをもとに整備される新キャンパスにおいて、九州大学が50年、100年先にもその活力を維持し続けるために、そうした未来への対応を考慮する必要がある。そのために、社会状況の変化に対応しつつ、研究・教育のポテンシャルを維持・向上し、世界へ向けた最高水準の研究の推進、新しい学問の創造、社会への貢献等を戦略的に展開できる施設用地を「大規模組織増への対応用地」とは別に確保しておく必要がある。

本マスタープランでは、空間軸「キャンパス・モール」と並行して東西に伸びる連続した用地を、「未来のポテンシャル軸」として確保する。

「未来のポテンシャル軸」上の用地の利用目的には、以下の様なことが想定されるが、その利用方針を全学的に定めた上で将来的な利用を図る。

- ・単なる増築に対応する用地とはせず、例えば、教官主導のプロジェクト研究施設等、研究・教育活動のポテンシャル向上のために戦略的に活用し、九州大学が将来大きく飛躍する場とする。
- ・センター・ゾーンの産学・地域連携と国際交流拠点「タウン・オン・キャンパス」内の将来建設用地とも異なる位置づけとし、研究・教育施設と密接に関係する戦略的施設の将来建設用地として位置づける。

例えば、「未来のポテンシャル軸」上には、戦略的リエゾン機能、民間資金等の活用施設、民間研究施設、学生起業家支援施設等の立地が想定される。



図7-4-3 未来のポテンシャル軸

(4) 研究・教育活動を支援する動脈「幹線道路」

新キャンパス内に主として自動車交通のための幹線道路を設け、沿道に駐車場を分散配置する。さらに、共同溝等のインフラストラクチャーの幹線を埋設し、新キャンパス全体の動脈としての役割を果たす。

また、沿道の良好な環境、生物多様性保全ゾーン等の緑地の環境保全、道路の維持管理等のため、幹線道路等の道路境界から10m以上壁面を後退し、沿道は原則、緑地としての整備を行う。

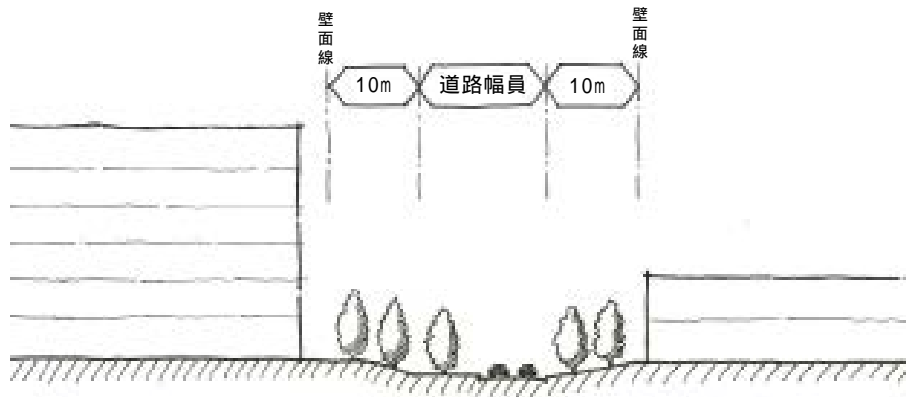


図7-4-4 アカデミック・ゾーン内の道路の断面構成イメージ

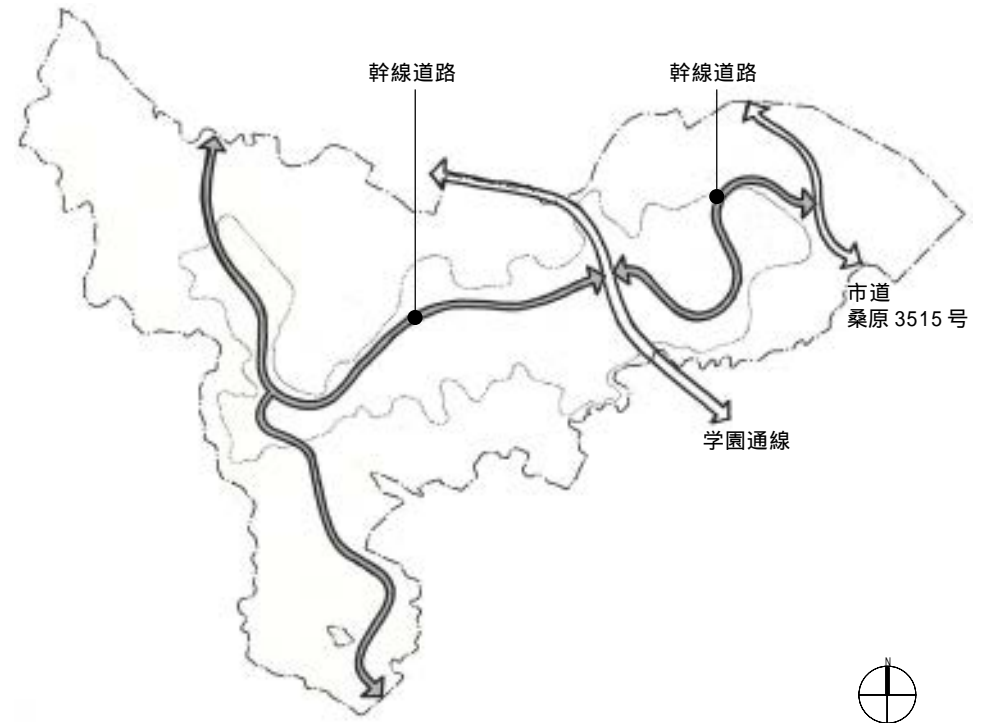


図7-4-5 幹線道路

(5) 憩いと安らぎをもたらす開放的なオープンスペース「キャンパス・コモン」

キャンパス・モールの南側には、保全緑地との間に開放的なオープンスペース群が連続する「キャンパス・コモン」を設ける。キャンパス・コモンは、アカデミックゾーン内の南側に位置し、日照環境や開放性の点で優れた環境を提供する空間となる。

このオープンスペースは、キャンパスの象徴的な空間として位置づけ、美しいランドスケープ・デザインを施すと同時に、寄附施設等の立地用地として、全学的な利用・運営方針に基づく将来的な有効利用を図る。

ランドスケープ・デザインにおいては維持管理の面からも十分な検討を加え樹木の選定等を行う。

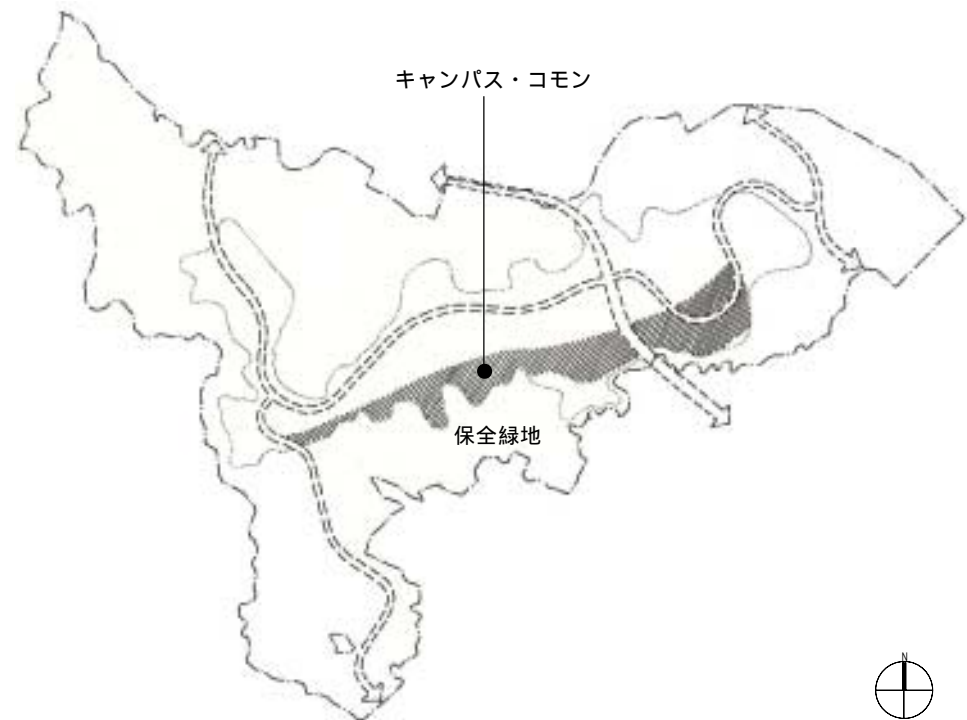


図7-4-6 キャンパス・コモン

(6) 緑地をつなぐ「グリーン・コリドー」

東西に長い敷地を適度なスケールで分節するとともに、周辺の保全緑地をつなぎ、緑・生態系をネットワークするグリーン・コリドーを設定する。

グリーン・コリドーは各場所毎の地形特性、周辺環境、施設計画、維持管理方法の特色に考慮し、適切なランドスケープ・デザインを行う。



図7-4-7 グリーン・コリドー

(7) 新たな伝統を刻む「象徴的空間」

新キャンパスでは、ゲート機能や歩行者動線と自動車交通の結節点の機能を持つ場所に、周辺の環境を意識しながら、建築、植栽、彫刻、記念碑等を一体的にデザインすることで新キャンパスを代表する固有な空間、記憶に残る空間、不変の空間、美しさや風格を備えた空間といった特徴や意義を備えた象徴的空間創りを行なう。

特に、大学全体を代表する空間としての「大学の顔」、各領域へのゲート空間としての「アライバル・ポイント」、大学全体で共有する空間としての「キャンパス・コモン」を新キャンパスにおける象徴的空間と位置づけ、それぞれをアカデミック・ゾーンの骨格に豊かな場所性を与える重要な要素として計画的に配置する。

1) 大学の顔

学外からの来訪者のアプローチと大学のアカデミックな空間が初めて出会う場所を、大学の顔と呼び、ランドスケープ・デザインと建築設計を一体に捉えた空間構成により、象徴的なゲート性を持つ空間とする。アカデミック・ゾーン内の、イースト、センター、ウエストの各ゾーンそれぞれに大学の顔を位置づける。

2) アライバル・ポイント

幹線道路から、各研究・教育施設もしくはキャンパス・モールに自動車交通が寄り付く場所をアライバル・ポイントと呼ぶ。キャンパス・モールから研究・教育施設への人々のアクセスや、学外からの来訪者に対する玄関でもあり、同時にキャンパス内の日常的な交通結節点でもある。

各領域を象徴する空間として、その領域を利用する学生、教職員が抱く誇りと愛着の拠り所となる個性ある空間創りを行なう。

3) キャンパス・コモン

キャンパス・コモンは「一つの共通の空間をキャンパス全体で共有する」という総合的なキャンパスの精神を実感する空間である。ハーバード大学のハーバード・ヤード、ヴァージニア大学のザ・ローン、スタンフォード大学のジ・オーバルの例に見るように、九州大学の新キャンパス固有のオープンスペースとして、世代を超えて継承すべき象徴的空間と位置づける。

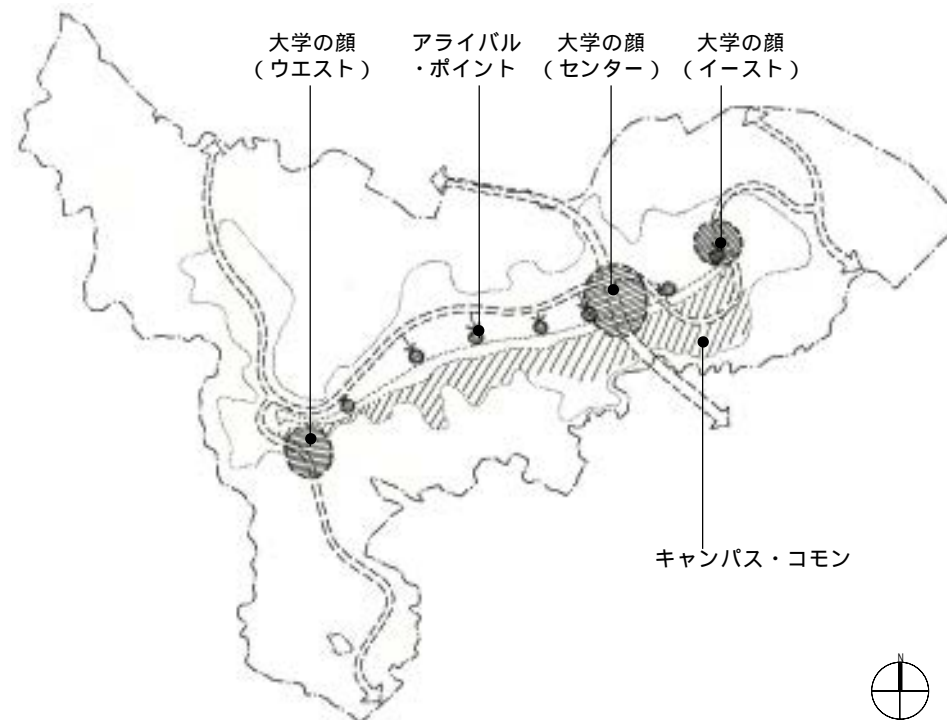


図 7-4-8 象徴的空間

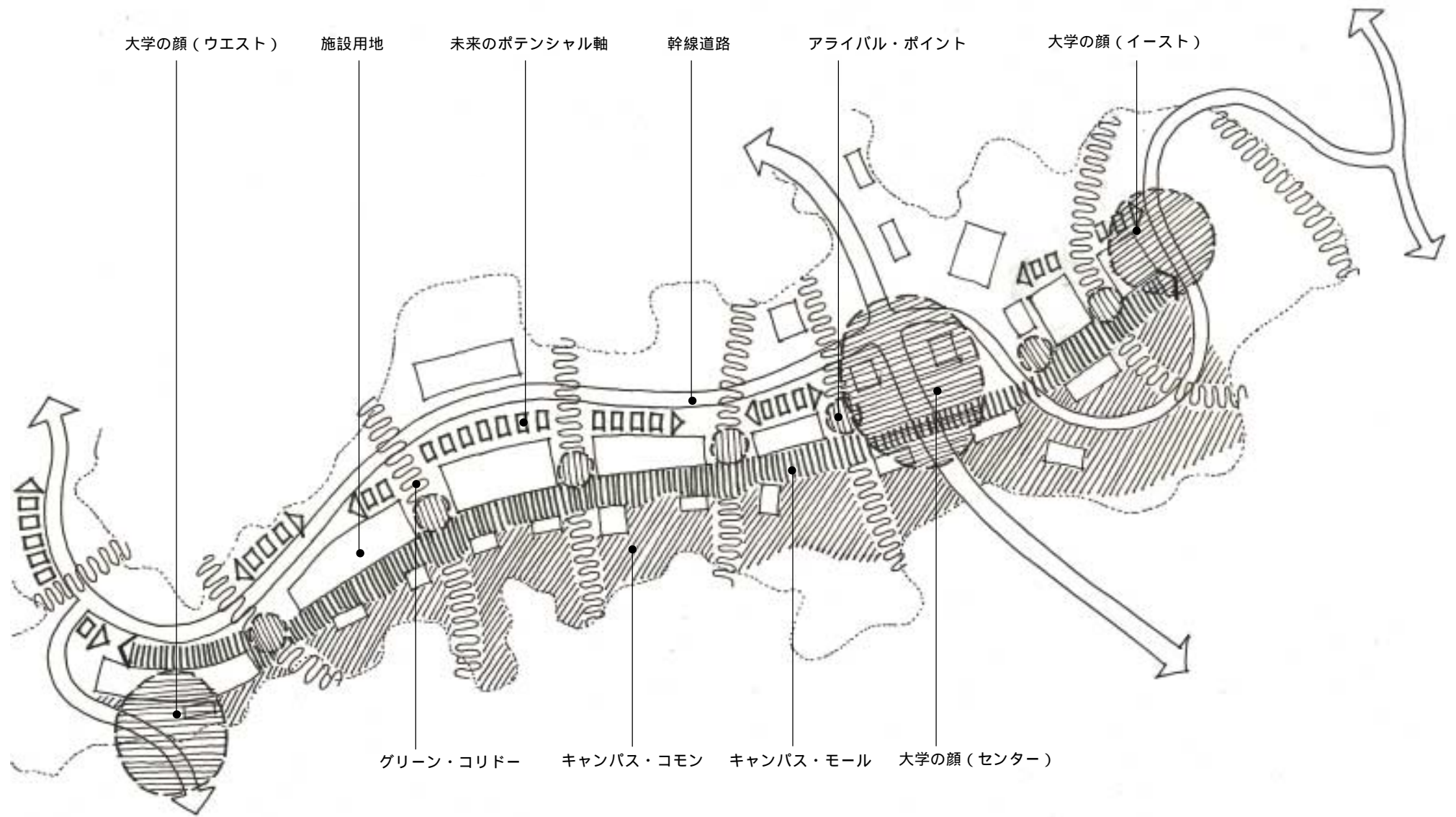


図7-4-9 アカデミック・ゾーンの骨格形成の構成概念

(8) 保全緑地の環境資源を活かす「ネイチャー・トレイル」

大学キャンパスには、知的交流を促す活気ある生活環境を提供する一方、思索に耽り、精神的潤いと憩いを与える静寂な環境も求められる。

新キャンパスでは、保全緑地やキャンパス・コモンの豊かな自然環境を活用し、安らぎと潤いを与える豊かな生活環境を提供するために、保全緑地や整備緑地内に散策路として「ネイチャー・トレイル」を整備する。

保全緑地には、生物多様性保全ゾーンの沢地、豊かな自然を体感する森林、古代の遺跡、および周辺の田園地帯や山並み等の良好な眺望が得られる視点を多数包含しており、それらの特徴的な空間をつなぐネイチャー・トレイルのネットワークを形成することで、それらの空間の活用を図ることができる。

ネイチャー・トレイルは、そのルートや利用目的によって特徴ある散策環境を提供する。保全緑地や整備緑地を心身のリフレッシュや体験学習に活用する「自然観察の道」となり、自然の静寂な環境の下で思索に耽る「哲学の道」、「逍遙の道」ともなる。

経済的で適切な維持・管理の方法に配慮しつつ、ネイチャー・トレイルの整備とネットワーク化を図ることにより、眠っている自然環境資源の活用が図られ、キャンパス全体の魅力の向上へとつながることとなる。

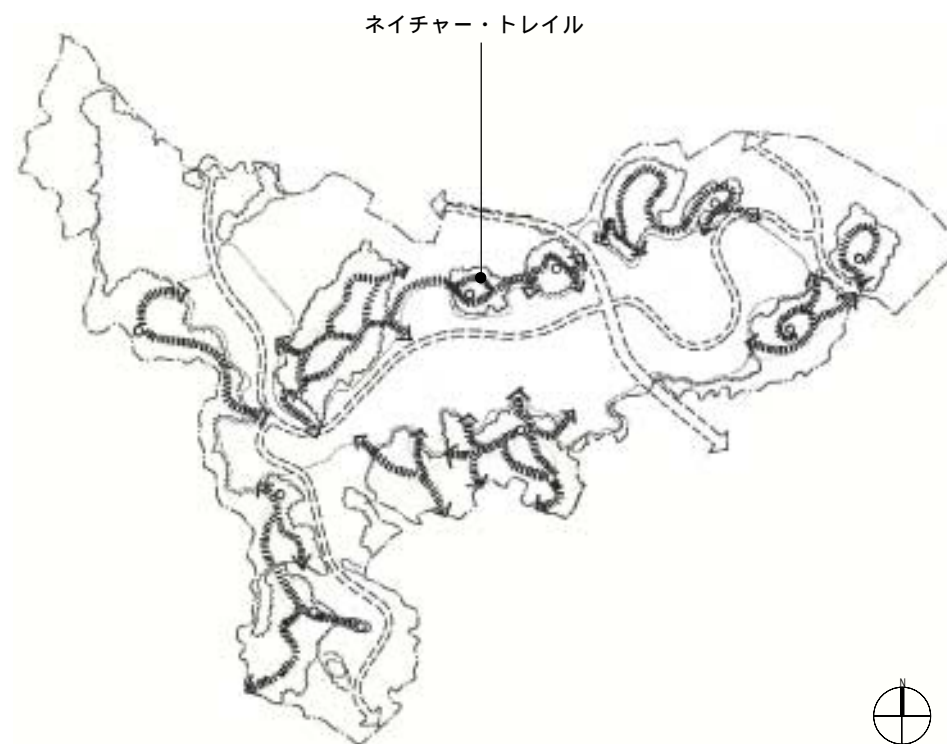


図7-4-10 ネイチャー・トレイル

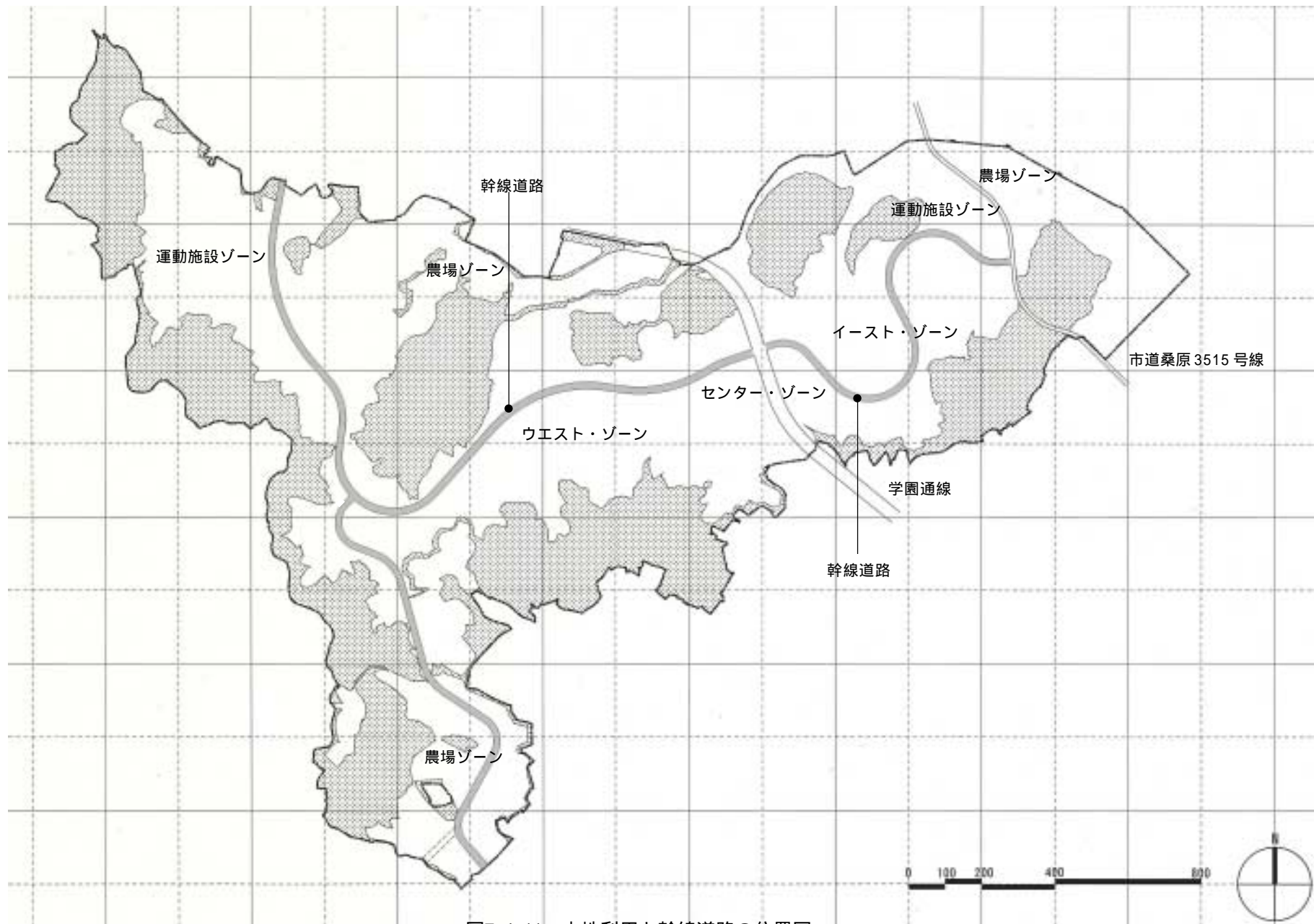


図7-4-11 土地利用と幹線道路の位置図

7.5 施設配置の方針

(1) 研究・教育施設

研究・教育施設は、一般研究・教育施設、大型実験施設・共同利用施設によって構成される。これらの施設群を新キャンパス内外から見た場合のスカイライン等の景観や圧迫感等の影響に配慮しながら、集約化して、土地の有効利用に努める。

1) 一般研究・教育施設

一般研究・教育施設は、研究室、ゼミ室、会議室、講義室、小規模の実験室、実習室、情報学習室(自習スペース・情報ラウンジ・ロッカー室等)等からなり、キャンパス・モールに沿って配置する。

2) 大型実験施設、共同利用施設

大型実験施設、共同利用施設は、関連部局との位置関係や騒音振動等、施設の特異性に応じた周辺環境との関係に配慮する。従来、個別の施設であった施設の集約化、複合化および重層化を図り、土地の有効利用に努める。

(2) 全学教育施設

全学教育施設は、総合大学に相応しく、学部低年次の学生全員が相互に交流しながら学習できる環境を整備する観点から、センター・ゾーンに集中して配置する。ただし、教育の実施方法、施設の有効利用、管理・運営、学外開放等の観点から、施設の一部をセンター・ゾーン内に分館として配置することも検討する。

(3) 図書館、情報基盤センター、総合研究博物館

図書および情報関連の中核施設として、全学及び文系図書を管理する中央図書館、理系図書を管理する理系図書館、情報ネットワークの中核施設である情報基盤センターがある。

中央図書館は、全学的な利用や学外からの利用に配慮しつつ、イースト・ゾーンに配置する。理系図書館は、情報基盤センターと一体的施設として、ウエスト・ゾーンに配置する。いずれの施設も、施設規模、書庫や設備の荷重、日照等に配慮し、地下空間の利用を図る。

総合研究博物館は、九州大学に蓄積された標本、資料、研究成果等を展示公開し、来訪者への案内サービスを担うビジター・センターとしての機能も備えた施設として、センター・ゾーンに配置する。

(4) 生活支援サービス施設等

物販店、食堂、カフェ等の生活支援サービス施設は、情報学習室、事務施設とともに、キャンパス内での活動・生活の支援を図るための拠点として、また、学生の利用しやすさと活気あるキャンパス環境をつくり出す観点から、キャンパス・モールに沿って適正に分散配置する。また、教職員施設、保健管理施設は、全学の利用に配慮して、センター・ゾーンに配置する。

(5) 課外活動施設

課外活動施設は、学生の課外活動の促進に配慮しつつ、その用途に応じてセンター・ゾーン、イースト・ゾーン、運動施設ゾーンに分散して配置する。

(6) 交流施設等

学外者との交流や学外からの利用が想定される韓国研究センター等の国際交流施設、研究者交流施設、大学講堂、総合研究博物館等は、将来的に整備される産学連携施設や地域連携施設も含め、施設相互の連携に配慮しつつ、センター・ゾーンに配置する。また、これらの施設は、国際会議等のコンベンション機能やインフォメーション・サービス機能等、学外からの利用者等に配置する。

(7) 事務施設

事務施設は、大学事務局庁舎(大学本部)および各部局の事務施設からなる。大学事務局庁舎は、大学の中心的な管理・運営機能を担う施設、および学外からの公式訪問者等を受け入れる施設として、センター・ゾーンに配置する。また、大学事務局庁舎以外の各部局の事務施設は、集約化を図り、教職員や学生の利便性に配慮しつつ、キャンパス・モールに沿って適正に配置する。

(8) 居住・宿泊施設

学生宿舎、国際交流会館等の居住・宿泊施設は、周辺地域のまちづくりとの連携を視野に入れ、センター・ゾーンおよびイースト・ゾーンの北側を中心に配置する。民間資金等の導入による施設整備や学外の民間施設等の活用を図る。

7.6 学府・研究院制度の空間構成

新キャンパスにおいて学府・研究院制度の理念を実現するために、学部(学科)、学府(専攻)、研究院(部門)相互の關係に配慮しながら、学際的教育や研究の活性化、組織間の交流・連携を促す空間、競争を促す空間等を確保した空間構成とその管理・運営を導入することとなる。

一般研究・教育施設の計画、設計、整備、管理・運営にあたっては、本マスタープランにおける新キャンパスの骨格形成と土地利用の方針に基づき、キャンパス・モールを軸とした学部、学府、研究院の研究・教育空間構成モデルを基本型として、アカデミック・プランにおける研究・教育活動が展開していく上での最適な空間構成を各ゾーンごとに構築し、その構成に合った管理・運営とともに導入する。

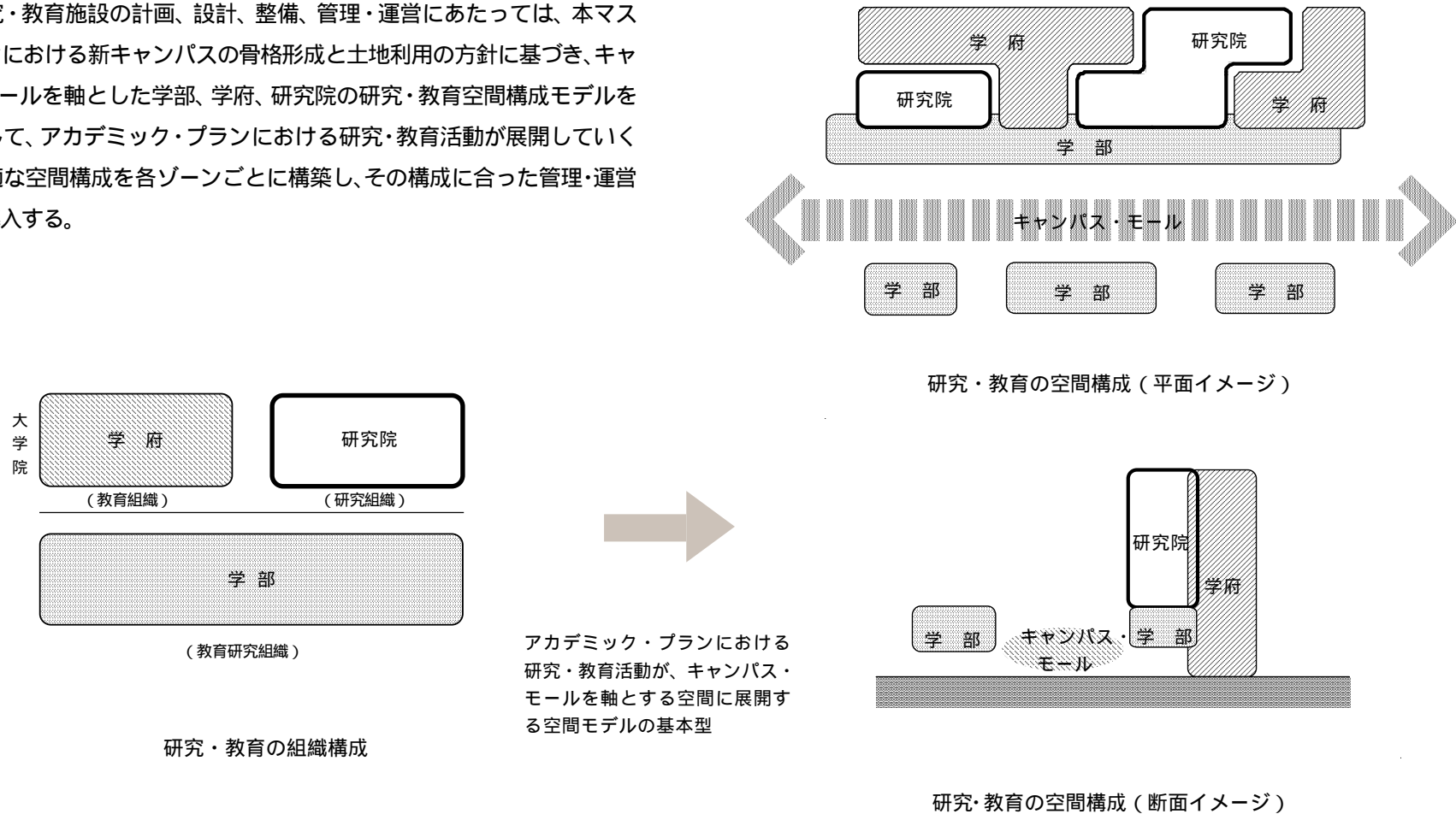


図7-5-1 キャンパス・モールを軸とした学部・学府・研究院の空間構成ダイアグラム

7.7 アカデミック・ゾーンの土地利用の方針

(1)ウエスト・ゾーン

1)地形特性

ウエスト・ゾーンは、東西に細長く、緩やかな西上がりの傾斜である。ゾーン東部の南北に山(古墳)がある以外は、南北に開けた敷地であり、西側は生物多様性保全ゾーンと農場ゾーンに隣接している。南端部は、尾根を切り取ったテラス状の敷地からなる。

2)空間構成

・知的活動をつなぐ空間軸

東西に貫くキャンパス・モールを中心とし、これに沿って講義室等の教育施設を配置し、学際的な教育が展開する空間軸を構築する。ウエスト・ゾーン内のキャンパス・モールの高低差は原則的にスロープにより処理し、沿道の研究・教育施設の低層部の空間や屋内と屋外の空間が複合した活気のある歩行空間とし、楽しく歩けるキャンパス環境を形成する。

・部局間のつながりを重視した研究・教育施設群の配置

理学、数理学、システム情報科学、工学、農学を主とする研究・教育施設群は、学府・研究院制度の理念を実現するコンセプトに基づき、キャンパス・モールの空間軸に隣接して展開する。施設・土地の一体的な利用と学際的な研究・教育の活性化を促すことを目指し、施設用地を分節することとなるグリーン・コリドー上空を横断するブリッジ状の施設整備も含めて、研究・教育施設間のつながりを重視した施設整備を行う。施設群を外部から見た圧迫感や周辺地形の景観との調和に配慮して施設ボリュームを適宜分節化する。

・開放的な「キャンパス・コモン」

自然なテラス状の敷地を含めた南側は、オープンスペースが連続したキャンパス・コモンとして、開放的なランドスケープ・デザインを施す。

キャンパス・コモン北側のキャンパス・モール沿道には理系図書館、学生交流施設、情報ラウンジ等を配置し、キャンパス・コモンとキャンパス・モールの空間的連続性、ランドスケープとキャンパス景観の形成に配慮して、これらの施設の高さや隣棟間隔を設定する。

・未来を拓く戦略的施設群の立地用地「未来のポテンシャル軸」

大型実験施設の集約化、一体化により、土地の有効利用を図り、北側の幹線道路に沿って、未来のポテンシャル軸を形成する用地を確保する。

また、ゾーンの北西側には、大規模な組織増等に対応するための将来的な拡張用地を確保する。

・グリーン・コリドー、アライバル・ポイント、象徴的空間の形成

学内幹線道路からキャンパス・モールに抜ける空間をグリーン・コリドーと一体となったアライバル・ポイントとして整備する。アライバル・ポイントは、幹線道路からキャンパス・モールに入るゲート空間となり、東西に長いキャンパス・モールの空間を分節して長い距離感を心理的に和らげる効果を持たせるとともに、各ブロックの象徴的空間とする。

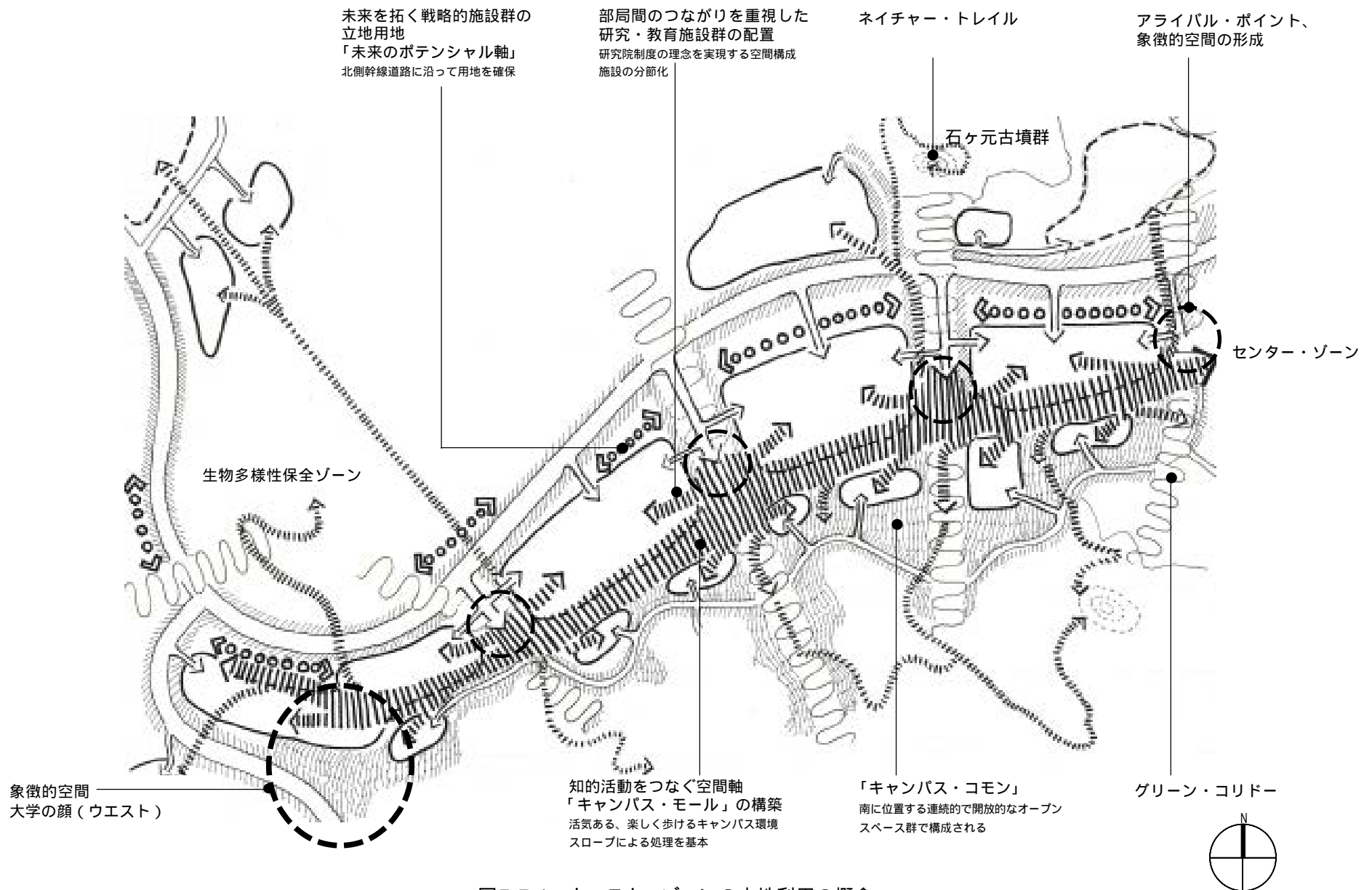


図7-7-1 ウエスト・ゾーンの土地利用の概念

(2)センター・ゾーン

1) 地形特性

センター・ゾーンは、学園通線を挟む東西両側の敷地に位置し、ウエスト、イーストの各ゾーンに向けて上っていく地形となる。大坂の池を越えて南に広がる田園地帯を見渡すことができる。

2) 空間構成

・イースト・ゾーンとウエスト・ゾーンを東西につなぐ空間軸

センター・ゾーン内の東西移動の中心となるキャンパス・モールは、同時に東西のキャンパスをつなぐ軸として重要な空間である。キャンパス・モールの沿道は、全学教育施設、交流施設、生活支援サービス施設等を配置し、空間軸全体が活気に満ちた環境を形成する。キャンパス・モール内で高低差が生じる部分は、沿道の施設と一体となったエスカレータ、エレベータ等の移動装置を整備し、バリアフリーな環境を形成する。

・大学エントランスの顔となるオープンスペース「キャンパス・コモン」

緩やかに南に傾斜し、学園通線を挟んで東西に連続するオープンスペースは、学園通線上を南からアプローチする際に最初に視野に入ることを重視した大学の顔に相応しいランドスケープ・デザインを施す。

・「未来のポテンシャル軸」用地の確保

未来のポテンシャル軸を形成する用地を幹線道路沿道に確保する。

・全学教育施設の集約的な配置

全学教育施設は、キャンパス・モールに沿い、他の研究・教育施設との間のスムーズな移動を可能とするよう配置する。開放的なオープンスペースや交流施設等とともに、大勢の学生が休憩時間にくつろげるなど、快適なキャンパス・ライフを提供する環境を形成する。

・大学の顔となるメイン・ゲートの空間

学園通線からキャンパスに入るメイン・ゲート周辺には、学園通線西側に大学の風格を感じるアカデミック・プラザとそれを中心とする施設群を、東側にはタウン・オン・キャンパスの中心的空間としてのコミュニティ・プラザとそれを中心とする施設群を配置し、西側と東側で一体となった、地域と世界に開かれた大学の顔としての機能と空間を整備する。

・タウン・オン・キャンパスの中心的機能の集積

国際交流施設、産学連携施設、総合研究博物館等の交流、連携施設をセンター・ゾーンに配置し、将来的な民間施設等の誘致を視野に入れた、タウン・オン・キャンパスの中心的機能を担う拠点を形成する。

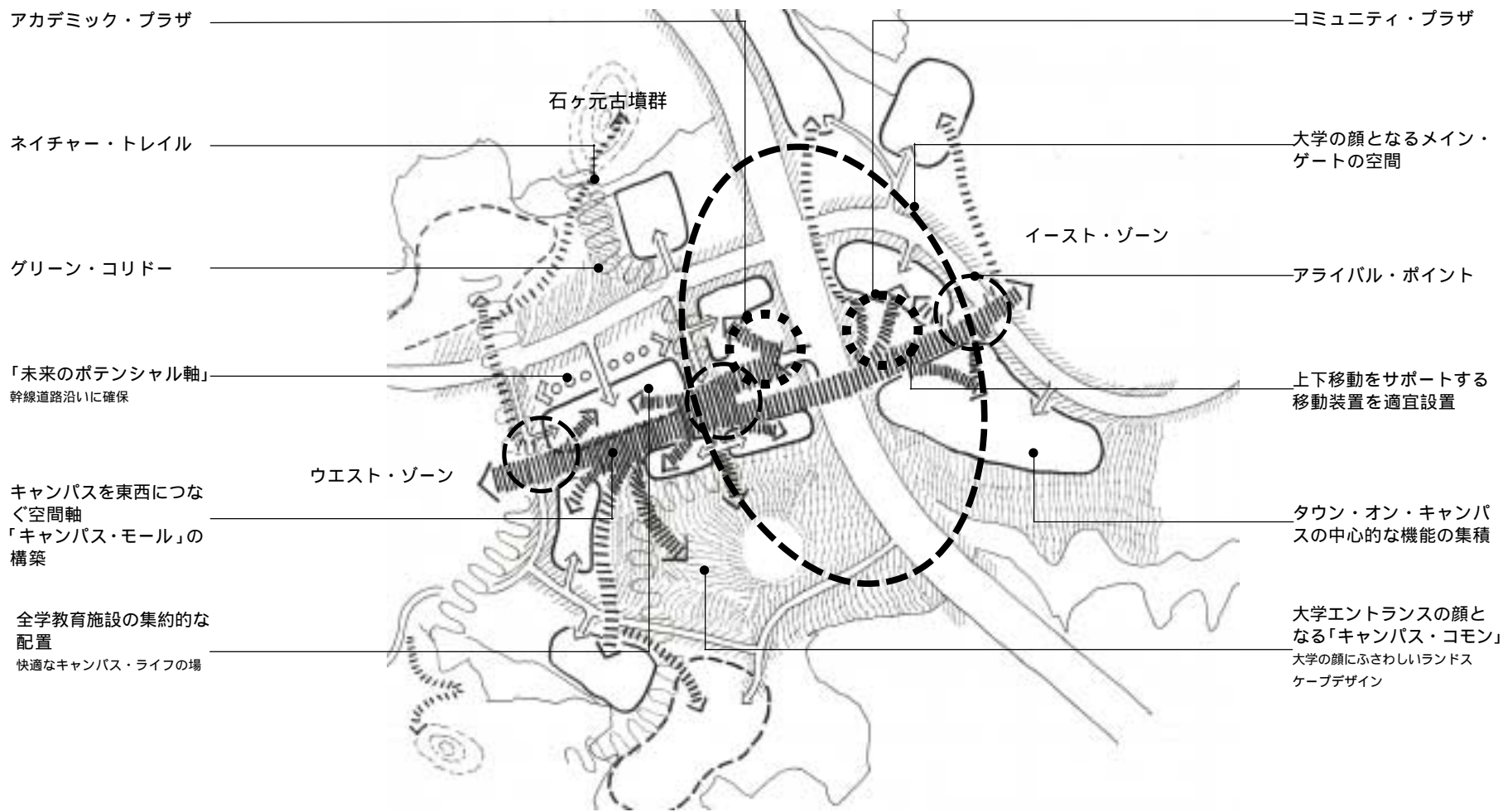


図7-7-2 センター・ゾーンの土地利用の概念

(3) イースト・ゾーン

1) 地形特性

イースト・ゾーンは、南側の田園地帯とキャンパスの西側を望める眺望の良い高台に位置する。北側は、戸山と金屎古墳の山に、東側は水崎城址の山と塩除古墳の山によって囲まれており、その山間の方角には、博多湾を望むことができる。

2) 空間構成

・知的活動をつなぐ空間軸

知的活動をつなぐキャンパス・モールを中心として、その沿道に中央図書館、講義室等の教育施設群を配置し、施設間の移動利便性に配慮した空間軸を構築する。

・部局間のつながりを重視した研究・教育施設群の配置

人文科学、言語文化、比較社会文化、人間環境学、法学、経済学を主とする研究・教育施設を学府・研究院制度の理念を実現するコンセプトに基づき、キャンパス・モールの空間軸に隣接して展開する。施設・土地の一体的な利用と学際的な研究・教育の活性化を促すことを目指し、施設空間の効率的な利用、土地の有効利用、施設間のつながりを重視した配置とする。

・ベルベデーレ(眺めの良い場所)を中心とした開放的な「キャンパス・コモン」の形成

土地造成後に高台の敷地から南を望む眺望を特徴とするキャンパス・コモンを形成する。

・ランドマークとなる水崎城址の山

キャンパス・コモンの東側に位置する水崎城址の山をキャンパス内外から望むことができるランドマークとして位置づけ、配置計画の拠り所とする。

・未来を拓く戦略的施設群の立地用地「未来のポテンシャル軸」

研究・教育施設を集約化、一体化した配置とすることにより、土地の有効利用を図り、主としてゾーン北側に未来のポテンシャル軸を形成する用地を確保する。また、ゾーン東側には、大規模な組織増等に対応するための将来的な拡張用地を確保する。

・アライバル・ポイントと象徴的空間の形成

キャンパス内の幹線道路とキャンパス・モールが交差、あるいは接する場所をアライバル・ポイント、および象徴的空間として位置づける。特に、東側からの市道(桑原3515号線)からのアプローチに対して、大学の顔としての空間創りに配慮する。

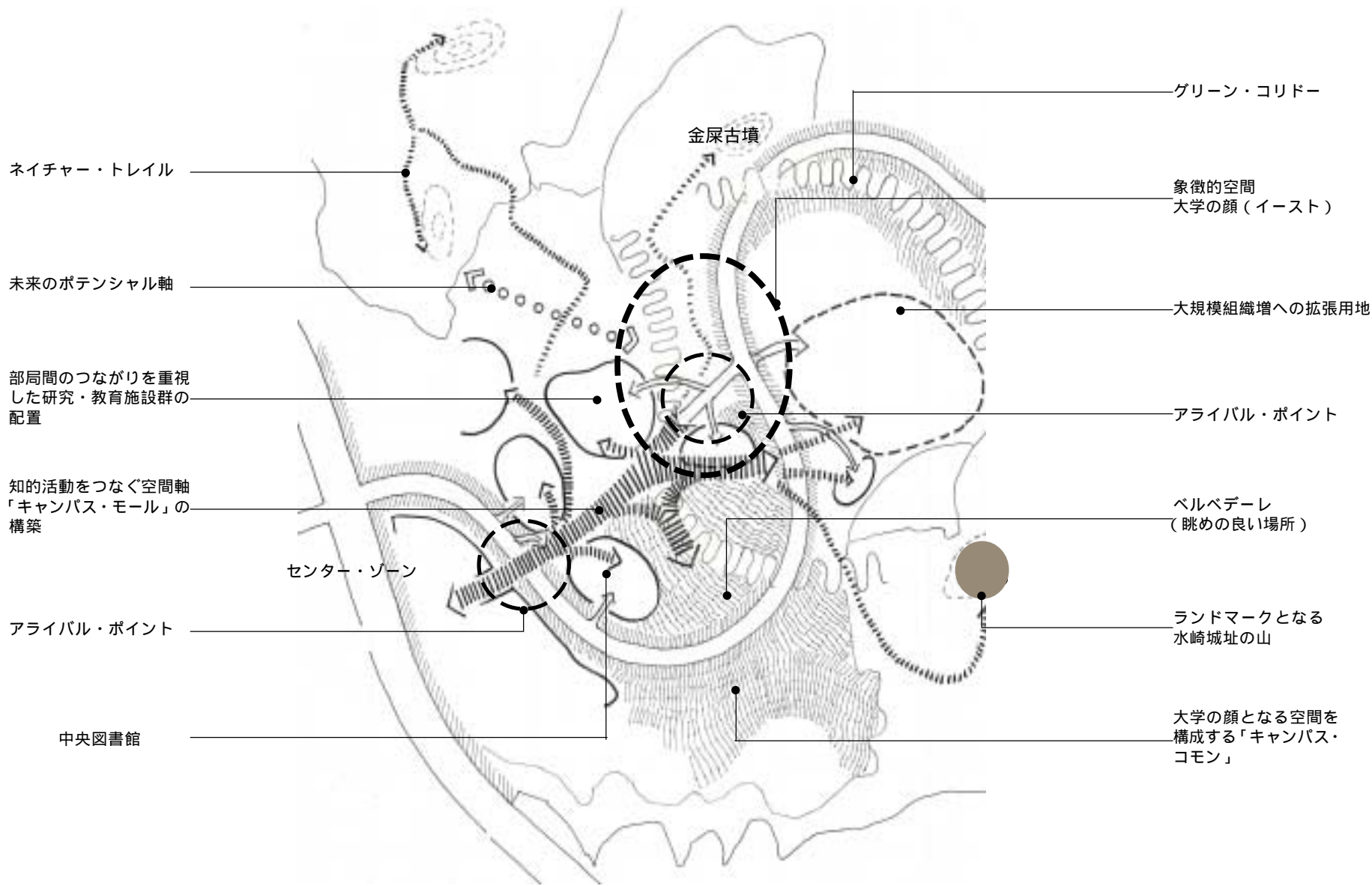


図7-7-3 イースト・ゾーンの土地利用の概念

7.8 農場ゾーンの土地利用の方針

農場ゾーンは、農場ゾーン・東地区、農場ゾーン・北地区、農場ゾーン・南地区の3地区で構成される。

(1) 地形

農場ゾーン・東地区は、新キャンパス用地の東部に位置し、標高1～3mの比較的平坦な地形であり、古くから水田として利用されている。

農場ゾーン・北地区は、新キャンパスの中央北部に位置し、アカデミック・ゾーンと県道桜井太郎丸線に挟まれる。この地区の西部から中央部にかけては、地形が緩やかに北に傾斜しており、東部はほぼ平坦な地形である。

農場ゾーン・南地区は、アカデミック・ゾーンの農学系施設に近接する新キャンパスの南西部に位置し、起伏が大きく複雑な地形で、南へ傾斜し、日照に恵まれている。

(2) 実験圃場及び施設の配置方針

実験圃場の配置に際しては、関連施設との連携を十分に考慮する。施設の有効利用のために、その集約化を図る。

地形の大幅な改変はできる限り避ける等、現況の地形を活かす配置計画とする。

水田圃場は、稲作期に大量の水を必要とすることから、利水機能を持たせた調整池を隣接している農場ゾーン・東地区と農場ゾーン・北地区の東部に配置する。

飼料・畑地圃場は農場ゾーン・北地区の西部に配置し、各圃場への配水は利水機能を持たせた調整池から行う。

日照条件に恵まれた農場ゾーン・南地区には桑園・畑地・果樹・蔬採・花卉の各圃場を配置する。各圃場への配水には、井戸や調整池からファームポンドに揚水した水を用いる。

(3) 施設・制御システム

農場管理棟は農場ゾーンを統括する施設として位置づけ、アカデミック・ゾーンや分散された農場施設との連携を考慮し、農場ゾーン・北地区に配置する。

実験圃場および施設は、フィールド・サイエンスの先端的な研究・教育の場とするだけでなく、同時に、環境保全機能を有することが求められている。そのために、情報ネットワークを利用した通信制御網、有機物のリサイクル施設やコンポスト製造施設等の先端技術を活用した制御システムの導入を検討する必要がある。

(4) 農場用水の確保

農場ゾーンにおいては農場用水の確保が必須条件であり、調整池の利水容量分の計画的な利用を図るとともに、学外からの導水も検討する。

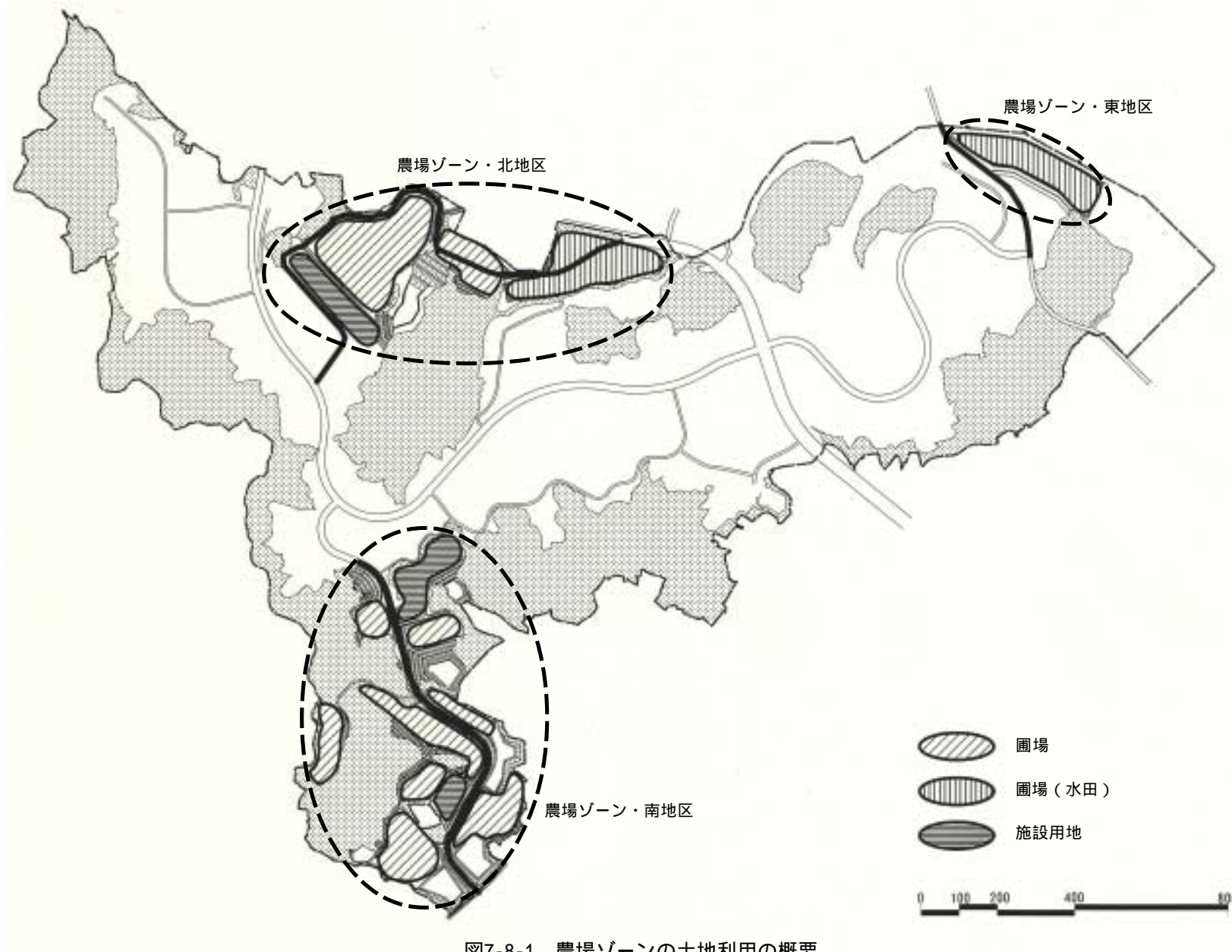


図7-8-1 農場ゾーンの土地利用の概要

7.9 運動施設ゾーンの土地利用の方針

(1) 運動施設の整備方針

健康、潤い、交流の機会をもたらすレクリエーション活動や課外活動は、大学生活に欠かすことができない。新キャンパスにおいても、生活環境の充実の観点から、豊かな自然環境を活用した気分転換、散策の場の創出や、課外活動、レクリエーション活動に必要な運動の場の提供を重視し、施設を整備する。

特に、陸上競技場等の運動施設の整備には、平坦で広い土地を要するが、新キャンパスの土地を有効利用し、多様な運動種目、利用目的、地域への開放等に配慮した施設の機能的な配置を行なう。

(2) 運動施設の配置方針

総合大学に相応しい多種の運動競技種目に対応した運動施設群は、課外活動用、全学教育用、および一般学生や教職員のレクリエーション活動用として利用することを想定している。

新キャンパスでは、野球、アメリカンフットボール、サッカー、陸上競技等の屋外運動施設と武道、体操競技、バスケットボール等の屋内運動施設を整備する。

運動施設ゾーン・西地区には比較的大型の屋外運動施設、屋内運動施設を機能的に配置し、運動施設ゾーン・東地区には、主として屋外運動施設を配置する。

アカデミック・ゾーン内には、全学教育での利用、および学生、教職員のレクリエーション等のための運動施設を配置する。全学教育での利用を主たる目的とする運動施設は、全学教育施設とのつながりと低年次学部学生の利用を考慮してセンター・ゾーン内に配置し、イースト、ウエスの各ゾーン内には、学生、教職員のレクリエーションを中心とする多目的運動場等を確保する。

なお、地域に開かれた大学として、運動施設を学外者が利用できるように配

慮するとともに、そのための運動施設の管理・運営の方法や体制づくりを行なう。

(3) 課外活動施設の配置方針

課外活動施設は、文化系、音楽系、体育系のサークル活動に利用する施設、および学生と教職員の交流等に利用する施設がある。課外活動の特性、運動施設との関係、音等の研究・教育施設への影響等を考慮して文科系、音楽系、体育系の3種に大別して機能的に配置し、効率的な利用を図る。

(4) 合宿交流研修施設の配置方針

合宿交流研修施設は、運動施設との一体的利用や学生の利用しやすさに配慮しつつ、運動施設ゾーン西地区に配置する。

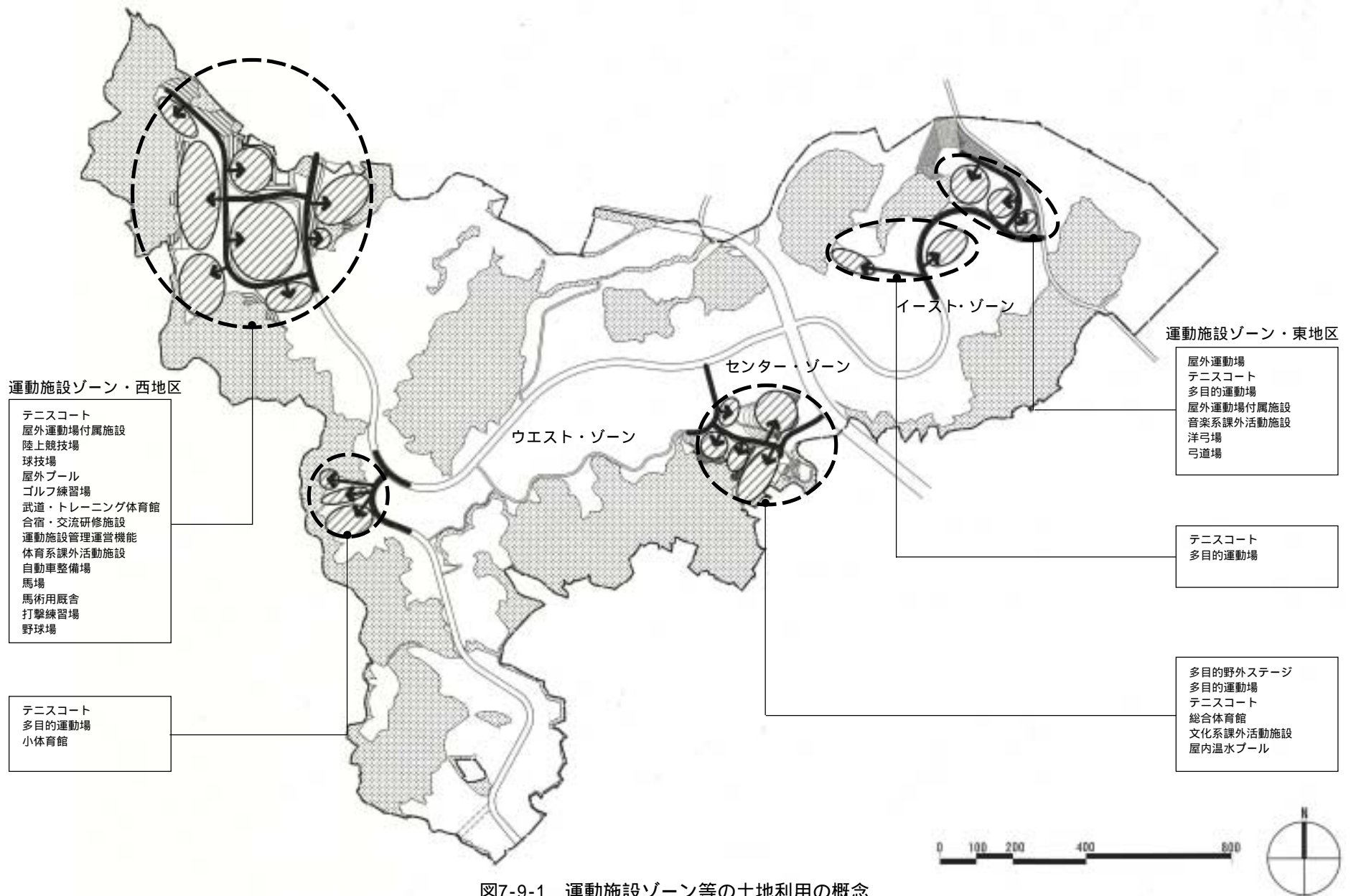


図7-9-1 運動施設ゾーン等の土地利用の概念

7.10 保全緑地の土地利用の方針

(1) 保全緑地

保全緑地は、環境と共生する魅力的なキャンパスをつくり育てていくうえで不可欠である。草地、湿地、人工林、二次林等を含む森林生態系を保全の対象として、多様な生物相を維持できる植生管理と植栽誘導を行い、野外学習、福利厚生、研究・教育の場としての活用を図る。

保全緑地には、生物多様性保全の先導的役割を担う「生物多様性保全ゾーン」、理学系実験圃場を配置する「野外生物実験地」がある。

保全緑地は、文化財や眺望のきく視点を巡る散策ルート(ネイチャー・トレイル)やグリーン・コリドーによって連結し、キャンパスに憩いと潤いを与える場となることを目指す。

(2) 生物多様性保全ゾーン

農場ゾーン北地区とウエスト・ゾーンとに挟まれた保全緑地の沢地一帯を、新キャンパスにおける生物多様性保全の先導的役割を果たす「生物多様性保全ゾーン」として位置づける。ここでは、陸上植物及びそれに依存する動物の多様性、水生生物、土壌生物と菌類の多様性を保全し、里山生態系の復元と維持を図る。このゾーンは、狭義の自然保護区とは異なり、農耕を通じて利用されてきた里山の生態系を復元し、自然観察等を通じて、森林や野生生物について学生、教職員、市民が学習する場と機会を提供する。

(3) 保全緑地等の維持・管理

保全緑地を適切な状態に維持するための方策が必要となる。維持・管理のためには、保全緑地の管理上必要な管理動線を確保する。

維持・管理にあたっては、生態系の保全、水源涵養、森林群落維持、研究・教育活動の利用、レクリエーション活動の利用、防災・防犯や近隣への影響等に配慮する。

同時に大学経営の視点から経済性に配慮した維持・管理方法でなければならない。

これらの条件を考慮し、適切な維持・管理方法や体制の導入を図る。

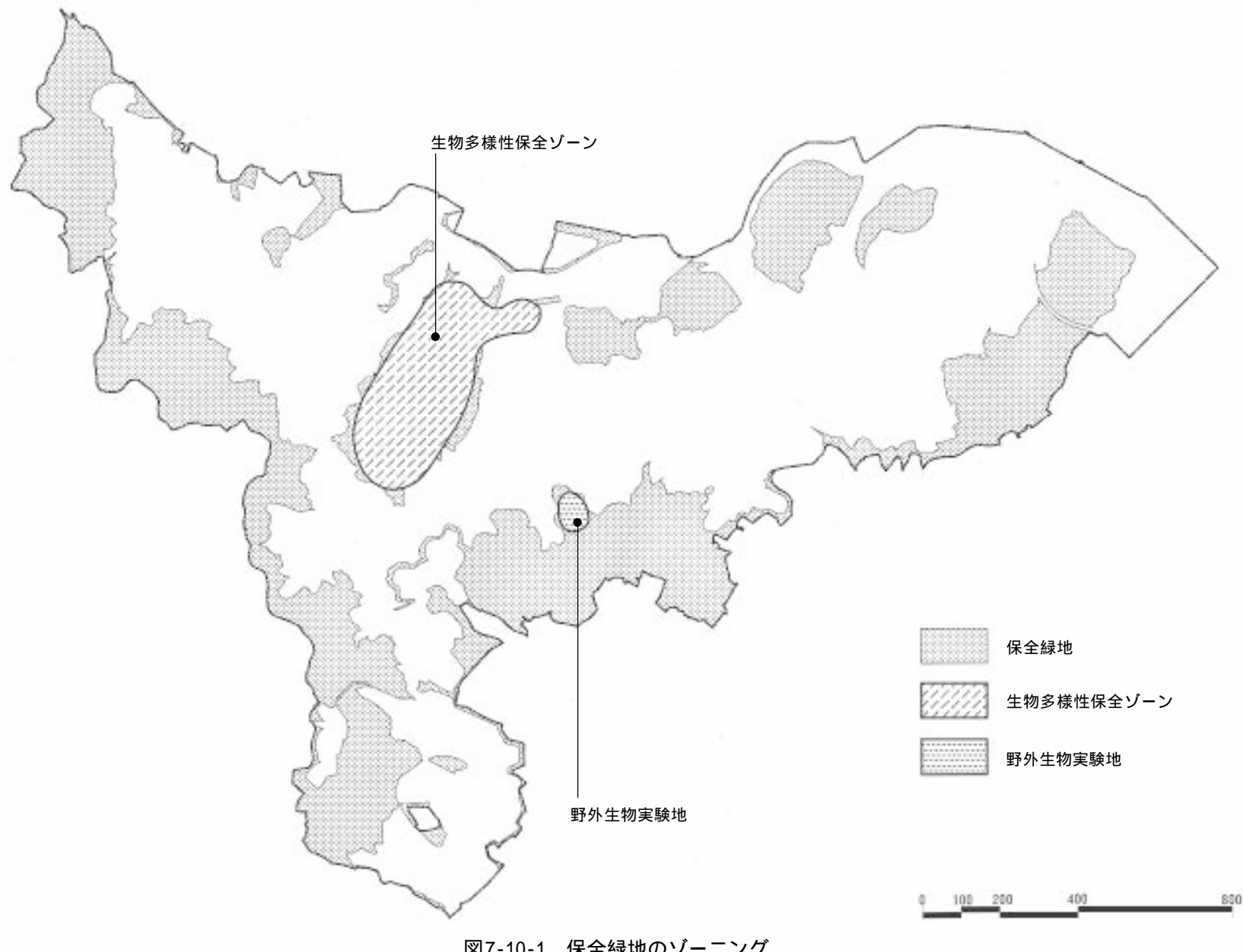


図7-10-1 保全緑地のゾーニング

7.11 土地造成の方針

(1) 土地造成の留意点

アプローチ・ルートとゲート、湧水源「幸の神」、治水・利水や雨水浸透施設等による地下水の涵養、歴史環境の保存等を踏まえ、研究・教育活動の活性化を促進できる用地の確保や地域と融合したキャンパスとしての土地造成を計画する。

(2) 移動や景観への配慮

アカデミック・ゾーン内の造成は各施設間の連携や歩行者の移動等を考慮し緩やかな勾配とする。また施設用地として利用できない尾根部の造成端部については現況地形を一部残し周辺地域から見たキャンパスの景観にも配慮する。

(3) 法面の保護への配慮

造成法面の勾配は景観等にも配慮した勾配とし、単調で大規模な法面が発生しない造成計画とする。また法面の保護については一般的な工法のみではなく、経済性を考慮しつつ、表土と中低木類を一括した林床生態系移植や根株移植と木チップを用いた表土保全による法面緑化工法を採用し法面の早期樹林化を図る。

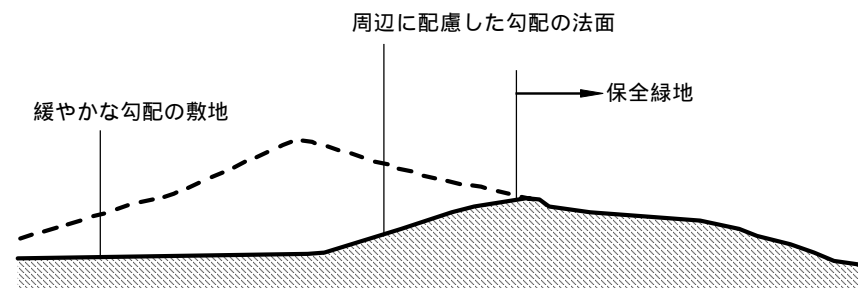


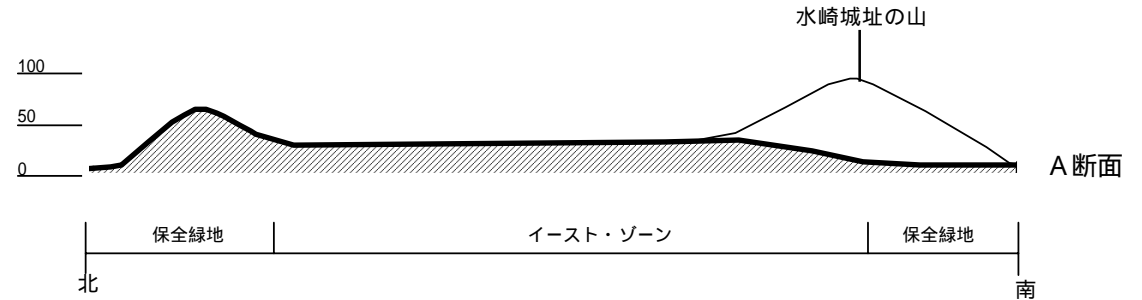
図7-11-1 造成のデザインイメージ

(4)造成断面のイメージ

A . イースト・ゾーン造成イメージ

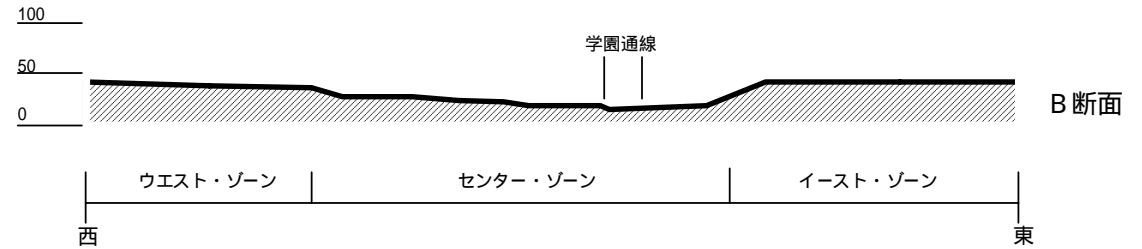
南北を保全緑地に囲まれ、南東側にはキャンパス全体のランドマークとなる水崎城址の山が控えている。

施設用地の南側が開かれ、見晴らしの良い開放的な土地を形成する。



B . センター・ゾーン造成イメージ

学園通線を中心に、東側、西側それぞれに上がる緩傾斜地形を形成する。イースト・ゾーンおよびウエスト・ゾーンが台地上の主として研究教育施設が立地する土地を形成するのに対し、センター・ゾーンは学園通線からアクセスしやすい地域に開かれた土地を形成する。



C . ウェスト・ゾーン造成イメージ

南側、北側に開けた土地を形成する。

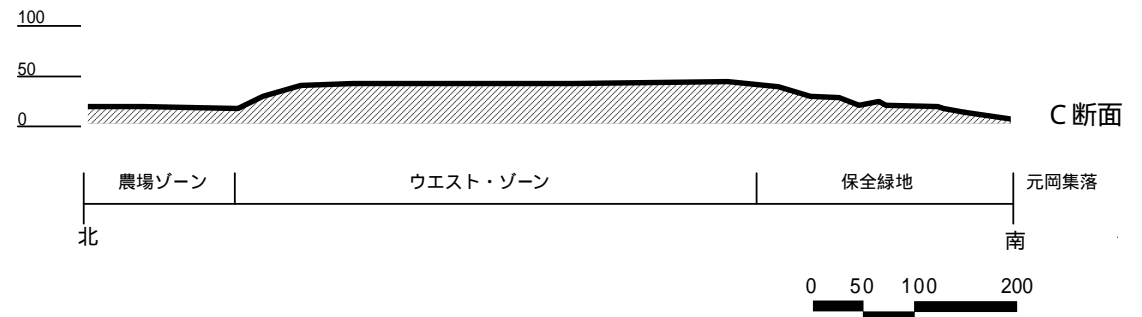
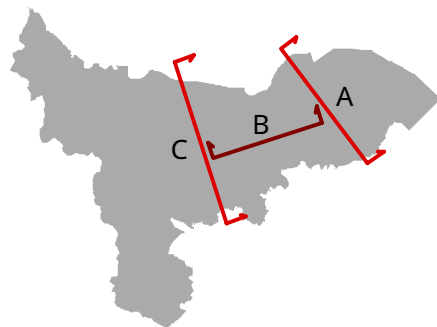


図7-11-2 造成断面イメージ